

2005年(平成17年)1月15日(土曜日)

# 北海道新聞

抜けるような青空だった。昨年十二月二十二日、札幌市清田区の里塚斎場に六十三のひつぎが次々と到着した。三十ある火葬炉の前で喪服の一群がそれぞれのひつぎを見送る。手を合わせる人、目頭を押さえる人。死者に別れを告げる厳粛な場面だ。

二つだけ、「不詳」という名札のかかる炉があった。遺影も位牌も供物もない。炉の中は一カ月前に心中した五十一六十代とみられる身元不明の男女だった。「寂しいもんですよ。たった一人で見守っていた葬儀会社「極楽堂はなや」の中島浩盟社長(四三)がつぶやいた。

同社は、市の委託を受けて無縁仏を弔う唯一の業者。死因は事故や病気などさまざまだ。天涯孤独の人だけでなく、親族がいるのに引き取り手がないケースすらある。家業を継いで約二十年になる中島さんは思う。「仲が良かったか、疎遠だったか。人の一生で死ぬ時ほど家族のあり方が現れる場面はない」